

デュークームにおける或る一つの問題

—— 社会的なるがゆえに、普遍的であり、その逆ではないことについて ——

助教授 山下 淳志郎

われわれの日常における会話でさえ論理に従っていないければ、話として成立しない。話が話として成立し、存立するためには、論理がその話を支配規定し、話を話たらしめるものとして既に存在していなければならない。このことは、まさに理論的である科学において、より一層明白で、確実である。科学者が自己の主張を科学的、理論的に構成する場合、或いは諸事象の分析的研究の結果からそれら諸事象を総合的にそのものとして構成し、説明叙述する場合、仮えそれが充分に意識され、考慮されていなくとも、彼は既に或る論理に従って理論構成を行っているのである。それ故ここで一つの問題が生じる。理論構成が既に存する論理に従ってなされている限り、この理論構成は、それが従っている論理によって支配され、規定され、それ故それが従う論理の如何によってそれ自体の性格、更にはその妥当性すらも問われるのではないかと云う問題である。私がここで取り上げる問題も実はこの問題に係属している奇妙な問題である。と云うのも、デュークームがその社会学の対象である「社会的事実」に関して、それは社会的であるが故に普遍的なのであり、その逆ではないと云う、この

ことについて、私自身この命題を一方ではそのものとしては肯定するにも拘らず、他方では果してそうであるのか、と問うからである。

私の問題、それは、実は彼の思考法とその論理において普遍が既に前提とされており、その結果以上の如き主張が逆になされているのではないか、それ故普遍と個との関係も彼の思考法と論理によって彼の社会学にみられる関係にならているのではないか、ということである。つまりデュルケームの社会学形成の根底に前提として存在するであろう思考法と論理を私は、それがかように存在する限り、彼の社会学成立に対して何らかの点で規定しているのではないか、規定しているとすれば、どのように規定しているのだろうか、という点において問題とするのである。

そこでこうした問題を論及するに当り、以上の如き主張を端的に示しているデュルケームの言葉を先ず取り上げてみる。

「人はいかにも知れない。一つの現象は、それが社会の成員の全部、あるいは少くとも大多数に共通的でない限り、すなわち普遍的でない限り、集合的 *collectif* ではない。けれども、もしも一つの現象が普遍的であるならば、それは疑いもなく、この現象が集合的、すなわち少くとも義務的 *obligatoire* だからであって、決して普遍的であるが故に集合的なのではない」(*La réelles de la methode sociologique. quinziesme edition. 1968. p.10.*)

次にタルドの主張に対する批判として、

「もちろんあらゆる社会的事実ば模倣される。すなわちわれわれがすでに明らかにしたように、普遍化される傾向をもっている。しかしそれは、社会的事実が社会的であるからである。つまり義務的であるからである」(*ibid. p.12. note*)

そしてかかる社会について

「社会は、そのよって立つ基礎を意識内で作られたものとして見いだすものではない。社会は自らその基礎を作

さてこのように主張するデュルケームの社会学に対して一つの批判がなされている。それは、彼の社会学は「社会実在論」であるといった批判であり、それに対して、デュルケームは社会を超個人的な実在としたのではなく、社会は生き生きとした活動的な個性的な個人から生じており、それゆえ彼の社会的事実とは、個人から生じた社会の、しかしそうであるとしても、個人に対して超個人的にある客体としての社会の制度など、かかるものとしてある行動様式であるという反批判がなされる。例えば尾高邦雄氏などによってなされる反批判がそれである。

確かにこの反批判は、それを言葉通りに受けとれば、その限りでは正しい。事実デュルケームの社会的事実とは社会そのものの個人に対する一切、例えば慣習、道徳、宗教などといった如きもの一切が個人に対して示している作用様式である故、まさに以上の如く受けとることもできる。したがってデュルケームの社会学が社会を個人に対して超個人的な主体として実在させる実在論であると単純に断定してしまふことはできない。

しかしデュルケームの社会学がこのように社会実在論ではないということを認めるとしても、社会実在論とする批判に対する反批判をもそのまま認めることはできない。一言でいうならば、デュルケームの社会学が個性的に生き生きとした個人によって営まれる社会を描き示したという点に關しては実は全く逆である。デュルケームによって描き示される個人とは、この点に限つてのみ結論的にいうならば、有機的・心理的 (argantico-psy-chique) 抽象体である。そこでこの点を先ず明らかにして私の問題点に進むことにする。

彼によって示される個人、社会的に実在するとみられる個人は実は社会的なものによって埋めつくされている個人である。彼の言葉をみることにする。

「個人意識の中に存在しないものは社会生活の中にも存在しない。こういったことは明白な真理である。けれども個人意識のうちに見出されるほとんどすべてのものは社会から生じてくるのである。……それらの意識の諸状態は一般に人間の心理的性質からではなく、人々が一度結合 associer するとき、大なり小なり人の数と

接近の度合に従って相互に影響し合う形式から派生するものである」(Division.p.342)。
さらに

「個性は先在する社会的環境の内部において磨き上げられるゆえに、必然的にそれはこの社会環境の刻印をもっている。……この個性は自らが社会の産物であるから、反社会的(antisocial)なものをもっていない」(Ibid.p.264)。

このような言葉からみる限り、個人の意識の大部分を占めているものはまさに社会的なものである。それゆえ社会において存在するといわれている個人は社会的なものによって、ほとんど埋めつくされたものである。ところでこういった個人に関して次の如き言葉もまた見いだされる。

「社会的現象を個人的に表現すること、つまり社会的現象の個人的表出(manifestations privées)は一つの集合的原型(un modèle collectif)を部分的に再現(reproduire)しているのであるから、社会的な若干のものを確かにもっている。しかしまたそれらの各々はその大部分を個人の有機的・心理的構成(constitution organico-psychique de l'individu)に、また個人の置かれている個々の諸事情に負うている。だからそれらは本来の意味の社会学的現象(des phénomènes proprement sociologique)ではない。それらは同時に二つの領域に繋がっており(二つの領域に由来しており)、人はそれらを社会的・心理的(socio-psychiques)なものと呼ぶことができる」(Règles.p.10)。

ここでデュルケームのいっていることは、個人が社会的な様々の現象を自己のものとして外に表わす場合、その表わしたものに社会的なものがあるとしても、様々の社会的とみられるものの大部分を個人の有機的・心理的構成、つまり気質、体質に従って自己のものとして外部に表わしているものであり、それゆえ外に表わされるところのかかるものは本来の意味での社会学的現象、社会的なものではないということである。そこでかかるものは、実は一方においては社会的なものを含んでもいい故に、社会的・個人的なものと言った意味で、社会的・心

理的なものと呼ぶことができると、彼はいつているのである。確かにこれは、彼が社会に対して個人を独自の個性をもったものとして示したかのように思わせるものをもっている。しかしこの点こそが重要なのであり、この点においてこそ問題が生じてくるのである。

個人において示されたもの、また個人を通して示されたもの、それを社会的・心理的なものとみなす限り、個人において社会的なものと心理的なものといった二つの領域区分がなされており、これはデュークーム自身二つの領域（*deux régnes*）といった通りである。ところでこの点に関係して彼が社会学について語っている言葉をみると、次のようである。

「社会的諸現象の本質的特性は、それらが個人意識の上に外部から一種の抑圧をなしうるような力において構成されている故に、これらの現象は個人に基因するのではなく、したがって社会学は心理学の系（*un corollaire de la psychologie*）ではない」（*Règles*・p.101）。

この言葉において彼は明らかに社会学は心理学の系ではないといつて、後者に対する前者、すなわち社会学の独自性を主張している。つまり彼においては心理的とみなされるものは社会的なものから、したがって社会学から区別され取り除かれるのである。そこでそのみが社会学の対象となる社会的なもの、つまり今までみてこられたところの、個人の内面において大部分を占めるといわれるところの社会的なものを個人から取り除くと、個人はただ心理的なもの、社会学の対象にはならない心理的なもの、それだけに限られてしまう。確かに個人は社会的なものを、しかも彼のいう如く、自己の内部の大部分を占めるものとして自己内にもっている。このことは充分に認められねばならない。しかし個人はそれと同時に、まさに個人を個人といわしめる特殊なもの、個性を、——それがデュークームのいう如く、たとえ心理的なものであるとしても——もっており、個人はこれら二つのものを自己において統一させ、その統一において自己を社会的にと同時に、また個性的に生かしているのである、このように存在するところにこそ、社会に生きる個人の個人たる所以が、個性の個性たる所以がある筈であ

る。しかしデュルケームが個人をその内的構成の点で二つに区分し、個人の内面の大部分を占めるものとしての社会的なもののみを社会学の対象とする限り、彼が彼の社会学の領域においてみる個人とはまさにこのように区分された一方の社会的なものとしてのみの個人であるにすぎない。ところで、ここで問題となるのはこの社会的なものであり、それは、彼によれば、個人に本来内在しないもの、個人に対して外在的なもの、強制的、拘束的なものである。とすると、今まで云われてきた個人における社会的なもの、あるいは社会的なものとしてのみの個人とは明らかに個人に対する外在的なもの、拘束的なものとしてあり、それ故個人を純粹に個人として把握しようとするならば、個人における社会的なものを、むしろ個人に対する外在的なものとして、個人から取り除かねばならないことになる。それゆえ、この社会的なものを個人から取り除き、まさに個人的といわれるのを見ると、それは全くのところ、個人において区分された他の一つのもの、すなわち心理的なもの、ただそれだけに限られてしまうことになる。それゆえ、デュルケームは個人を個人としてみていないことになる。要するに彼において個人といわれるものは、個人を充たすものが実は社会的なものであるにもかかわらず、それが外在的なものとして今度は個人から区別される限り、その社会的なものを取り除いた後に残る心理的なものであるにすぎない。私が先に、純粹に個人といった場合の個人とは、デュルケームにおいて有機的・心理的抽象態であるといったのも、こういった点においてである。彼のいう個人は真に個人としてある個性的な個人といわれえないのである。

さてこうして、デュルケームの社会学を「社会实在論」とみなす批判に対する反批判が示す見解、個人を生き生きと生きるものとみなす見解に対して、それをそのまま肯定することができないという私の見解の根拠もまた示されたことになる。デュルケームによって示される個人とはそのように個性的に生きている個人ではなく、ただ抽象的に描き示された有機的・心理的個人であり、かかる個人は社会には真に実在しない個人である。彼によって示されるものはただ社会的であるが故に、普遍的であるともなされる社会的事実、それのみである。それが

個人を動かし、また彼に云わせると、個人を個人たらしめているのである。ここで問題とされるのはかかる普遍的な社会的事実である。が同時にこれと関連して、今まで個人に関してみてこられた二区分的思考法とその論理もまた問題とされるのである。

しかし個人についてこのようにみえてくると、当然のことながらデュルケムや、デュルケミアンから批判がなされるであろう。確かにデュルケムは分業によって成り立つ社会における個人について自由な、個性的な在り方をみているようである。そこでこの点について彼の「分業論」における主張をみると次のようである。

「何ら媒介なしに個人を社会に直接結びつけ」、「我々の個性が零である」程にまで「共同意識 *la conscience collective* が我々の意識の全域を完全に覆いつくし、これと合致するとき最大限に達する」連帯、すなわち「機械的な、あるいは類似による連帯」(*Division, p. 99-100*)の社会に対して、「個性」というものは、このような共同性 *la communauté* が我々(個人・筆者)のうちに場所を占めることの少ない場合に初めて生まれるものである」(*ibid. p. 100*)。しかしこの個性が最も発揮される社会、「個人が社会を構成している諸部分に従属しているから社会に従属している」ということができる如き連帯、すなわち「分業による、あるいは有機的な連帯」による社会では「一方においては各個人は、労働が分割されればされる程社会にますます密接に従属し、他方各個人の活動は専門化されればされる程ますます個人的になる」。そして「この場合、我々が受けている束縛は、社会全体が我々の上にその圧力を加えるときよりは軽いので」、「その束縛は我々の自発性から生じる自由活動により多くの余地を残している」。それ故この「社会は、要素が固有の活動をより多くもつに至る程、同時にますます活動することができ」、従って「全体の個性」と「部分の個性」とは「同時に増大する」(*ibid. p. 101*)のである。

デュルケムの主張はこのようである。

しかしここで示される個性、ますます増大し発揮されるとの如くみられる個性、それは明らかに機能 *fonction*

においてみられる個性である。今示された彼の言葉の中で「各人の活動は専門化されればされる程ますます個人的になる」"l'activité de chacun est d'autant plus personnelle qu'elle est plus spécialisée"といわれている。このように個人的になるといことは、まさに各個人の活動が専門化されるといふことである。専門化されることによる個人化、個性化である。個人は専門的な機能をもつことによってまさに個性的存在であるといわれているのである。個性とはまさに専門的な機能の面においてのみ、点においてのみみられる個性である。従つてこの個性は、個人としての、人間としての個性ではなくして、機能的な、機能的に働く人間の特殊の専門性であり、人間とは機能的な人間という意味での人間として、人間を云うよりは教師とか、判事とか、技師とか、更には課長、部長といった細分化した専門的機能者である。それゆえこうした人間、また個人は人間としての人間ではないわけであり、この結果ことで問題となるのは、この人間としての人間が捨象されているといふことである。例えば教師であるとともに人間であるといった人間としての教師、こうした存在がみられなければならないのにも拘らず、専門的機能の点においてのみみられた人間が彼において存在するのである。それゆえ、こうした意味において彼のとらえる人間、個人とはまさに抽象的な人間、個人なのである。

ところがこうした人間、また個人が接近し合つて一つの社会を作つていくときの、その接近の根拠について彼は次のように云うのである。

「分業は対立させると同時に結合させる。分業は、それが分化させる諸活動を集中させる。それは、それが引き離すものを接近させる。競争はこの接近を惹き起すことができなかったが故に、この接近は予め存在していたものでなければならぬ」(Division, p. 260)。

「分業は既に在る社会の内部において生じる。このことは、社会の内部における諸個人が相互に物質的に結合していなければならないことを全く單純に云っているのではなく、諸個人の間には道德的な結び糸(les liens maraux)が存在していなければならないことを云っているのである」(ibid. p. 260-261)。

ここで明らかなことは、分業がその一面においてもっている対立競争が接近を惹き起さない故に、接近は元々から予め存在していなければならず、この接近の結び糸は道德的な動的（*dynamique*）紐帯であるということである。それ故彼は、分業は対立させると同時に結合させると云いながら、実は道德的な結び糸を、しかも既に存在したものととして、接近の前提たらしめていることになる。従つて彼は、「社会生活は、あらゆる分業の外部に存在するが、分業はこの社会生活を前提とする。……この社会から、分業によつて統一を確保されている社会が生じる」（*ibid.* p. 25）とさえ云うのである。分業は自己外にある社会を前提としているわけである。分業が前提としている社会生活は、分業による連帯に基づくあらゆる社会生活の外部に存在するのである。こうして彼が云っている分業による有機的連帯の社会も実はそれ以前に存在する社会、即ち彼によれば「類似による、あるいは機械的連帯」に基づく「共同社会」における道德的紐帯とそれによる接近によつて可能となっているのである。それ故当然のことながら、この社会、さらには彼のいう社会的事実とは、本来的には分業によるものではないことになる。こうしてここで明らかなことは、分業社会における個人は一方では社会的に専門化された機能によつて、他方では個人にとつて外在的、權威的、拘束的な既存の社会的結び糸によつて埋めつくされていることである。そしてデュルケムにとってはこの点の主張こそが狙いでもあったのである。

社会的事実の外在性、拘束性、強制性は、彼が社会学を始めるに當つて常に何よりも先ず強調したものである。それは個人に対してのみでなく、現存社会に対してすら予め存在したものとして外在的、拘束的である。それ故それは現実に対して外在的な別種の独自の存在領域のものとして存在するようにみられねばならない。云いかえれば、それは個人に対して、また分業による社会に対してすら外在的、拘束的な独自の存在領域を形づくり、しかも個人や現存社会の存在根拠、行動（作用）規準、価値規準として存在することになる。それは、云つてみるならば、プラトンのイデア、またはイデア界に相当するものと考えることができる。デュルケムの思考法は明らかに二世界論に立っている。事実彼自身この点に關係するプラトンのイデア、イデア論を評價して次のように

云っているのである。

「或るものを概念づけることは、同時にその本質的な要素をよりよく理解し、そのものを総体 *totalité* のうちに位置せしめることである。何となれば、文明は、各々自己が特色づけられている概念の組織された体系をもっているからである。この概念の体系に対して、個人の精神は、プラトンの『ヌース』がイデアの世界に対して、*le* のと同じ境地にある。個人の精神はそれらに同化しようと努める」 (*Les Formes Elementaires de la vie religieuse* 岩波文庫(下)三三四頁——傍点(はな)は筆者)。

「論理的思惟は、人が感覚的経験に負うところの儼^{はな}い表象を超えて知能の共有地である堅固な理念の世界を考へるに至る時においてのみ可能である。論理的に考へるとは、実際、それは常に或る程度までは非人格的な様式で考へることである。それはまた『永遠の見地からして』 (*sub specie eternitatis*) 考へることである。非人格性と堅固さ、これが真理の二つの特色である。しかるに論理的な生活は、人間は感覚的外見と別個の真理が存在することを少くとも不明瞭ながら知っていることを明白に想定している。しかしどうしてこの概念に到達しえたのであろうか。……われら西洋の世界ではギリシャの大思想家と共に初めてこれは明瞭に自らの意識をなし、含んでいる帰結をとったのである。そして発見がなされたときには、それは驚きであつて、この驚きをプラトンは莊重な言葉で訳出したのである」 (同前、三三五頁)

このようにデュルケームの二世界論がプラトンのそれに対比せられるものであることは明らかであり、以上の引用の第一のものはこのことを端的に示している。ところでこれらの言葉が示していることは概念によって物を考へる、また物を概念づけるということ、そして本質的な要素をよりよく理解して、そのものを総体(全体)の中に位置せしめるということであり、このことを実はプラトンがイデア、イデア論を示すことによって果したということであり、デュルケームが、プラトンが莊重な言葉で訳出したというところの事柄、即ちイデアを示したということ、物の本質的な要素を概念によって理解し、それを全体の中に位置づけさせるということを、まさにイ

デアの見地から、「永遠の見地から」考えることとして理解し、受けとっていると云うことである。彼の行っている思考法はこのような思考法である。こうして以上において既にみられた如き性質をもつ彼の普遍的な社会的事実は「永遠の見地」、領域にあるもの、まさにプラトンのイデアに相当するものである。プラトンのイデアは個体に対して独自の世界をもっており、外在的、拘束的である。云いかえれば、それは個体に対してその存在根拠であり、認識根拠であり、物が真にそのものであるための価値規準であり、また人間の行動に関して云えば、その行動が真の、正しい行動であるための行動様式、規準、典型（*paradeigma*）であった。デュルケームの社会的事実とはまさにこういった規準、社会が社会であるための、また社会における人間がかかる人間としてあるための模範・典型である。

要するにデュルケームの思考法、論理は、個人に関してみられた二区分や今みられた社会的事実のプラトンのイデアとの類似性の点で、明らかに二世界論、二区分の論理によっているのである。それ故こうした論理によって考え出された社会的事実とはまさに普遍的なもの、しかも彼が社会的なるが故に普遍的であるというよりも、むしろ逆に普遍的であるが故に普遍的であると云うことすら出来る程に、普遍的なものである。そこでこの点について彼の思考法をもう少し彼の言葉そのものに則しながらみていくことにする。

彼は彼自身の主張を裏づけ確証するために歴史的な考察をする。彼の「分業論」もその一つと云えるが、後に発表された「宗教生活の原初形態」や「分類の原初形態」(*De quelques formes primitives de classification, 1901-1902*)もその成果であるのであろう。ところでこのような歴史的研究により、彼は社会を「社会種」(*le-specie social*)とみなすのである(*Règles, p.76-77*)。ここで云う社会種の種、それは種概念である。それは「長い間人々を対立させた二つの反対概念」、類(普遍)概念とそれに対する個別概念との「中間項」として示されるものである。例えば人類というのは類(普遍)概念であり、一郎、二郎という個人は個別概念であるが、日本人というならば、それは種概念である。日本人という概念は日本人として、一郎、二郎という個人に対

して普遍的であるが、同時に人類に対しては個別的なものであると云った意味で種概念である。デュルケームが社会をこういつた意味での種として扱えたのである。「この觀念は極めて有益であつて」、「そこには實際真に科学的なあらゆる研究の要求する一様性 (l'unité) と諸事實のうちに与えられる多様性 (l'adversité) とが結びついている」、と彼は云う (ibid. p. 77)。併し彼がこの種概念をこのように類 (普遍) と個との中間項として単に形式的にのみ扱っている限り、即ち相対立する類 (普遍) と個の分離に対して、それらをただ形式的に結合することによって、類的であると同時に個的でもあるといった概念を提示する限り、彼の思考法は明らかに形式論理の立場にあり、それに従っていると云わざるをえない。確かに種概念そのものは否定されえない重要な概念であり、彼が社会を種として把握したことは注目し得る。併し問題はこの種が類と個との中間項として如何に成立し存立するのかと云う点にあるのと同時に、この成立存立の仕方を種そのものの内において、即ち現實に存在する種そのもののうちにある普遍的なものと個的なものととの相互關係全体においてみなければならぬと云う点にある。デュルケームはこのことを、社会を種として把握することによって、その種としての社会のうちにみようとしたのであり、この試みの点では彼の考え方は正しい。併しこのようにみられる種、即ち社会のうちに於ける普遍的なもの、即ち社会的事実と個的なものとは二分され、互に外的な關係のままにおかれており、更に社会のうちの個人においても社会的なものと心理的なものが二分され、しかもこのうちの社会的なもののみが社会学の對象とされることによって、完全に分離されたままであることは既にみられた通りである限り、彼が普遍と個との中間項としての種の存立を種そのもののうちにみようとしているにも拘らず、その見方、捉え方、つまり普遍と個の結合の仕方は依然として形式論理的であると云わざるをえない。類的でもあり、個的でもある種、類的なものと個的なものとの統一、類的要素と個的要素とともに自己内において合わせもち、しかも一つの統一体をなしているそのものが、彼においてはただ類と個との中間的折衷的なものとして示し出されているにすぎない。彼の思考においては類というものと個というものが既にあり、またその中間に種があると云った形

式論理の、事実に対する形式的適用のみがあつて、事実として存在する種の存立の事実そのものの、その内的論理における、またそれに従つた把握はみられないのである。重要なのはそのものとしての類的なものと、そのものとしての個的なものをこれら兩者の相互關係全体において把握することによつて、類的であると同時に、個的でもあるところの、しかも類と個兩者の相互關係統一としてある種を全体として把握することであるが、彼にはこのような把握はみられないのである。云い換えるならば、弁証法的論理において種、即ち社会はみられていないのである。個は現実に存在する。と同時に類（普遍）的性質をもつ社会も存在する。併しデュルケムにとつてはこの社会の普遍的性質を類概念において、云い換えるところの社会を類概念として把握することがどうしても出来なかつた限り、彼はこの社会を概念的には類と個との中間項としての種として、ただ形式的に提示せざるをえなかつた、という結果が生じるわけである。彼が社会を類として認めることができなかったのは、彼が社会を事實に則して、或いは事實としてみていたからである。が併し彼のこうした注目すべき正当な事實の認識から次にその事實の説明、或いは科学的構成、叙述、即ち社会学の学問的形成に移ると、それは形式論理にのみ従つた形式的構成、叙述になつてしまつてゐるのである。

ところでこの点に關して尙注意をうながすのは、彼の「自殺論」や「分業論」の主として終りの部分にみられる「平常性」(la normalité)、「平均性」(la moyenne)という概念である。彼は云う。

「社会学が真に物に關する一つの科学であるためには、諸現象の普遍性が平常性の標識とならなければならぬ」(Regle. p. 74)。

併しこの「平常性」は「同じ種においてもっとも頻発的な諸形式のもとで、もっとも頻発するところの諸特徴を一つの同じ全体の中に、即ち一種の抽象的個性のうちにまとめてつくるところの要約的存在 (être schématique)」に對して云われる「平均性」と同義に受けとられ、「社会学者の研究するところのもの」は「平均的類型」(Le type moyen)、「即ち『類的類型』(Le type générique)と合致するものである」(ibid.)

とされているのであり (ibid. p. 56)、その限りそれはまさに形式論理において云われる普遍性 (外延性) と同じである。それ故デュルケームがこのような普遍性をもって社会的事実の、それ故社会学にとっての標識とする限り、矢張り彼は、彼自身担っていたかかる類 (普遍) 概念を予め念頭におきながら、即ち前提としながら事実としての、物としての社会的事実を考え、自らの社会学を作り上げている、と云うように考えざるをえないのである。

さて以上の論述を尙一層確実にするためには、「集合表象」についての、有機体との類比的説明や、人間における本能と意識の二区分とこの後者の再三区分による、社会と個人の間の関係考察などもみられねばならないが、これは他の機会にゆずらざるをえない。

とにかく以上の論述を通して明らかにしようとしたことは、デュルケームが社会的事実を正当にも事実として、即ち物として認めつつも、他方彼の思考法が形式論理にもとづいていたが故に、彼の主張自体に前提を結果とみなす如き論理矛盾が生じ、また社会と個人を二分し、個人を全く抽象的なものとしてしまったことであり、このことを知ることによって、我々が社会学 (他の諸学問においても同様であるが) に携さわる際、暗に前提とし、用いている論理が如何に大きな規定作用をなしているかをみ、この暗黙の裡の論理が改めて反省されねばならないであろうと云うことである。そしてこのようにデュルケームを取り上げたもう一つ理由は、政治や経済の面での構造と生活の面での構造との如くいわゆる二重構造化している現代社会、そして個人もそこにおいては機能人としての人間と、人間としての人間に分裂している現代社会を考えるとき、デュルケームの社会学は私にとってどのような意味をもってくるのかを問ひ、また彼の社会学をみることにによって社会学が私に對してどのようなね返り、その姿をみせてくるかを知らうということであった。つまり社会学は私にとって如何にあるべきかという私の間を、デュルケームをみることによって反省し、追究すること、これが私の論述の目的であり、動機であったのである。

以上